

## 10 ハンセン病と共に生きる（ハンセン病）

（ナレーター）皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。今日は私、山田としあきがお届けします。タイトルは「ハンセン病と共に生きる」です。

沖繩生まれの作家、伊波敏男さんは、1957年、中学2年生でハンセン病と診断され、その翌日には一人、人里離れた遠くの療養所に入所させられました。すでに治療薬があり、治る病気だったにもかかわらず、法律によってハンセン病患者には厳しい隔離政策がとられていました。「恐ろしい伝染病である」との誤った情報が広がっていたのです。

【伊波さん役】療養所には中学校までしかありませんでした。しかし私は進学しなかった。当時、岡山の療養所には高校があったため、相談を受けた自治会長は、親身になって施設から出る方法を一緒に考えてくれました。私は脱走を決意し、父を説得して一緒に本土行きの船に乗りました。

船内で父は、私に毛布をかぶせて、両手にある病気の後遺症を隠しました。もしハンセン病だとばれたら、父は、私を抱えて海に飛び込むつもりだったと後で知りました。決死の覚悟がなければ、ハンセン病回復者が外に出られない時代だったのです。

25

たどり着いた岡山の療養所で、運命を変える医師に出会いました。高校を卒業することが人生のゴールだと思っていた私に「社会復帰に備えて、手術を受けた方がいい」と、将来を考えた言葉をかけてくれたのです。望みを託して受けた1

30

2回目の手術の結果、手を動かせるまでに回復しました。高校を卒業後、社会復帰へ向けて専門学校に入ることを決め、東京の療養所に移りました。入所者の自由な外出は、法律で認められていなかったのですが、黙認する形で夜間の通学を支援してくれたのです。それでも常に手を隠して過ごしていましたが、「病気になった君は何も悪くない」という友人の言葉に勇気づけられました。

35

（ナレーター）その後さまざまな出会いがあり、ハンセン病回復者であることを隠さず生きたと決めた伊波さん。現在は、執筆のかたわら、積極的に講演活動を行っています。

40

【伊波さん役】理不尽な差別に疑問を持ち、私のことを大切に思い、行動してくれた人たちのおかげで、今の私があります。若い皆さん、目の前の偏見や差別に流されず、考え、自ら動く人になってください。そうして、誰もが生きやすい社会を一緒につくっていきましょう。

45

（本文948字）